

## ARSS (青年用強化子調査票)

### 日本版作成の試み (I)

坂 野 雄 二\*      George R. Holmes\*\*      越 川 房 子\*\*\*  
石 川 利 江\*\*\*\*      福 井      至\*\*\*\*\*      佐々木 和 義\*\*\*\*\*

#### Development of Japanese Adolescent Reinforcement Survey Schedule (ARSS-J)

Yuji Sakano\* , George R. Holmes\*\* , Fusako Koshikawa\*\*\* ,  
Rie Ishikawa\*\*\*\* , Itaru Fukui\*\*\*\*\* and Kazuyoshi Sasaki\*\*\*\*\*

#### SUMMARY

The two-fold purpose of this study was to compare and contrast the factors identified from the responses to the Adolescent Reinforcement Survey Schedule (ARSS) by the Japanese college students with the factors identified in the American study population, and to collect the basic data necessary for the development of the Japanese ARSS (ARSS-J).

The ARSS was administered to male (N=300) and female (N=200) late adolescent college students. The responses to the ARSS were factor analysed using a principal component method. Ten interpretable factors emerged from the factor analysis. The factors were compared and contrasted to identify similarities and differences in factors, factor loadings of the ARSS items and factors unique to each study population.

After the factor analysis, a recommendation was made to point out some practical issues to be in need of a solution in order to collect the ARSS-J items, to develop the ARSS-J and to validate it. It was also suggested that the replication of the current study with groups of early and mid-adolescents was necessary for making reinforcers during different periods of adolescent clear.

**Key Words :** Adolescent Reinforcement Survey Schedule, Japanese Version of ARSS, Cross Cultural Comparison, Factor Analysis.

---

※本研究を行うにあたり、早稲田大学平成2年度特定課題研究(課題番号90A-180)による補助金を受けた。

\*人間健康科学科

\*\*南カロライナ大学医学部

\*\*\*早稲田大学大学院文学研究科

\*\*\*\*人間基礎科学科

\*\*\*\*\*札幌大学女子短期大学部

\*\*\*\*\*神奈川県総合リハビリテーションセンター心理科

\* *Department of Human Health Sciences*

\*\* *University of South Carolina School of Medicine*

\*\*\* *Graduate Division of Literature*

\*\*\*\* *Department of Basic Human Sciences*

\*\*\*\*\* *Sapporo University Women's Junior College*

\*\*\*\*\* *Kanagawa Rehabilitation center*

## 問 題

Cautela と Kastenbaum (1967) は、日常生活における正の強化刺激を発見するための調査票として強化子調査票 (Reinforcement Survey Schedule : 以下 R S S と略記する) を開発した。

R S S は 4 部から成り立っている。第 1 部, および第 2 部は, 「フットボールをする」, 「仕事の出来映えを誉められる」, 「ヌード写真」といった, 併せて 139 の日常生活上の行動や出来事, あるいはことがらの項目に対して, それらの行動や出来事等を経験することが自分にとってどの程度の満足を感じるかを 5 段階評定させるものであり, それによって, 回答者の行動を形成, 維持, 変容させている強化子を発見しようとするものである。また, 第 3 部は 6 つの状況からなり, 「あなたは, 犬をつれて丘を歩いています。湖や小川のせせらぎ, 花や木々がとても美しく, “なんて最高の日なんだろう。こうして自然の中を歩き回れるなんて最高だ” と思っています。」といった状況設定に対してどの程度満足を感じるかを 5 段階評定させるものである。また第 4 部は, 回答者が満足を感じることがらや出来事を自由記述によって調べようとするものである。

Cautela と Kastenbaum (1967) は, R S S によって発見された個人の強化刺激は, Cautela 自身の提唱した行動療法の技法であるイメージを用いた「内潜増感作法 (covert sensitization)」において, イメージによって与えられる強化刺激として活用されるのはもちろんのこと, さまざまな治療・トレーニング場面や, 行動変容の基礎研究場面において, in vivo, あるいは in vitro で使用可能な強化刺激として活用できるものであると指摘している。すなわち, R S S は, 単に内潜増感作法を行う際に用いられる質問票にとどまらず, 行動カウンセリング場面における社会的強化刺激やトークンエコノミー法のバックアップ強化子を発見するための質問票, あるいはクライアントの一般的な社会的強化刺激の実態を調べるための基礎的質問票として, F S S (Fear Survey Schedule) などと同様に, さまざまな臨床場面においてその活用が期待されるものであると言える。

その後, 第 1 部と第 2 部に含まれる 139 項目を中心として R S S の信頼性と妥当性の検討が行われ (Kleinknecht, et al., 1973; Thorndike & Kleinknecht, 1974; Baron, et al., 1981), R S S は, 一般成人に対しては, 正の強化刺激を発見する尺度として有用なものであることが示されている。

一方, 青年用強化子調査票 (Adolescent Reinforcement Survey Schedule : 以下 A R S S と略記する) は, R S S の第 1 部, および第 2 部を基礎として, 特に青年期における日常生活上の正の強化刺激を発見するために Cautela (1981) によって作成されたものである。

われわれが日常生活上経験する行動や出来事, あるいはことがらが強化刺激として機能するとき, それらは, すべての人に対して同等の強化価値を持つものではない。ある出来事が強化刺激としての価値を持つかどうかは, 個人の強化歴による影響を受けるのはもちろんのこと, 発達差, 性差, 生活環境差, あるいは文化差などさまざまな要因による影響を受けている。そうであるならば, 日常生活における正の強化刺激を効果的に発見するためには, 単に R S S という 1 つの調査票によるのではなく, 特定の母集団を対象とした別個の調査票によって, そこでの強化刺激の実態を正確に把握することが必要であると考えられる。

さて, このように, R S S が, 児童期, 青年期, あるいは, 精神科領域, 障害児教育の領域といった特定の母集団に対してどれだけ有効かという点を考えると, R S S は, それに含まれる項目がそうした特定の母集団にとってどれだけ妥当性があるかの検討が行われなければならない (Cautela & Lynch, 1983)。そうした背景で, 合計 89 項目のことがらや出来事に対して, そのようなことを経験することが自分にとってどれだけ満足のいくものであるかを 5 段階評定させることによって, 青年の行動を形成, 維持, 変容させている社会的強化刺激を発見しようとする強化子調査票が A R S S なのである。そして, A R S S に関してはこれまでに, Holmes ら (1987) によって因子分析による検討が行われ, 青年期における社会的強化刺激の構造が明らかにされている。

ところで、わが国の行動療法の臨床面接においてはこれまで、クライアントの問題となる行動がどのように形成され、維持され、そして消去されるかという点について、行動を制御している強化刺激を発見しようとする際には、あるいは、望ましい行動の形成と維持に不可欠な強化刺激を発見する際には、そうした強化刺激が何であるかを臨床面接の中で調べることが普通であった。FSSのように恐怖の対象を詳細に記述する調査票は、その邦訳版がみられたが、強化刺激に関しては、それを詳細に記述する質問票はみられなかったのである。ARSSが、RSS同様に、単に内潜増感作法を行う際に使用される社会的強化刺激を調べるための質問票にとどまらず、行動カウンセリング場面における社会的強化刺激やトークンエコノミー法のバックアップ強化子を発見するための質問票、あるいはクライアントの行動変容に有効な一般的な社会的強化刺激の実態を調べるための基礎的質問票としてその活用が期待されるものであること考えると、青年期を対象とした臨床面接において、ARSSは、クライアントの日常生活における強化刺激の実態を知るための質問票として有意義な情報を提供してくれるにちがいない。

ただし、ARSSを日本で使用する場合には、ARSSに含まれる項目群について、それらが日本の若者文化に適合した項目でなければならない。すなわち、わが国の青年が日常生活の中で遭遇するはずの強化刺激が網羅されるように考慮する必要がある。また、そうした項目群の構造がどのようになっているかを調べることも、わが国の青年を取り巻く強化刺激の意味を理解するには必要なことであると思われる。

そこで本研究では、日本版ARSS (ARSS-J) を作成する準備段階として、ARSS (Cautela, 1981) の日本語翻訳版を用いてその因子構造を明らかにするとともに、それを Holmes ら (1987) によって既に発表されている米国版ARSSの因子構造と比較検討することによって、日本版ARSS作成のための基礎資料を得る。また、その結果にもとづいて、ARSS原版からARSS-Jに利用可能な項目群を選択し、ARSS-Jの作成に必要な資料を得る。

## 方 法

### 被調査者：

Holmes ら (1987) によって示された結果との直接比較が可能となるように、被調査者は男女大学生とした。

具体的には、東京、千葉、埼玉、神奈川、栃木、茨城、兵庫、福岡各都県の国公立13大学に在籍する男女大学生500名（男子300名、女子200名）である。年齢の範囲は18歳6カ月から22歳11カ月までであり、平均年齢は20歳6カ月（標準偏差：13.9カ月）であった。被調査者の学部構成は、文学・法学・経済学・政治学・社会学・芸術学・家政学・人間科学・教育学および教員養成課程・理学・工学・農学・医学・歯学にわたり、その人数構成は、大学生の人口統計にほぼ準じた。

### ARSS日本語版の作成と実施：

Cautela (1981) によって作成されたARSSを日本語に翻訳したものをを用いた。具体的には、「兄弟と話をする」、「バイクに乗る」、「お酒を飲む」などの合計89の項目について、「以下の項目をよく読んで、あなたにとってそのような出来事を経験することがどのくらい満足を感じるか、その程度を評定して下さい」との教示の下で、「不満である（1点）」から、「少しは満足できる（2点）」、「まあまあ満足できる（3点）」、「かなり満足できる（4点）」、「非常に満足できる（5点）」までの5段階で評定を求めた。

なお、米国版ARSSに含まれる項目の中には、たとえば、「マリファナを吸う」のように、明らかに日本の文化には適合しない項目が含まれている。しかしながら、そうした項目も、日本人青年にとって、潜在的な社会的強化刺激としてどのような意味を持っているかを明らかにするために、また、米国版ARSSの因子構造 (Holmes et al., 1987) と直接的な比較検討を可能とするために、質問項目の中にはそのまま入れた。ただし、教示文には、米国版には含まれない「なお、経験したことのないような場面でも、その場面を想定して回答して下さい。」との1文を付け加えた。

回答は、被調査者の所属する大学、学部等の単

位で、授業時間等を用いて集団で実施された。

## 結果と考察

### 1. 大学生における社会的強化刺激の構造

わが国における大学生の社会的強化刺激の構造を明らかにするために、因子分析を行った。始めに主因子解を求め、その後にバリマックス回転を行い、固有値の落差を考慮して主要な10因子を抽出した。なお、Table 1～Table 4に示される項目は、いずれも因子負荷量が.40以上のものである。

第1因子には合計17の項目が含まれ、分散の説明率は全分散の21%である。その内容には、「デートする」、「異性と食事に出かける」、「週末や休日を異性と過ごす」といった異性との日常的なつき合いに関する項目や、「キスをする」、「ヘビーペッティングをする」、「セックスをする」といった異性との性的接触に関する項目が含まれている。したがってこの因子は、「異性との社会的・性的接触因子」とであると考えることができる。また、全分散の11%の説明率を持つ第2因子には、「友だちと話しをする」、「友だちと電話で話しをする」、「ドライブに出かける」など、友人仲間との日常的なつき合いに関する行動項目17項目が含まれている。

したがって第2因子は、「友人との対人的・社会的関係因子」と呼ぶことができる。以上の2因子が全因子の中でも大きなものであるが、わが国の大学生にとって、友人仲間との日常的なつき合いに関する出来事や行動が大きな社会的強化刺激とな

Table 1 第1因子に含まれる項目と因子負荷量

項 目	因子負荷量
キスをする	.82
デートをする	.82
異性と遊び歩く	.81
異性と食事に出かける	.79
週末や休日を異性と過ごす	.78
異性からほめられる	.78
異性から注目される	.78
軽いペッティングをする	.77
異性と話しをする	.75
ヘビーペッティングをする	.74
セックスをする	.74
同い年の異性とつき合う	.70
車の中で愛をささやく	.69
異性に内緒話をする	.66
いちゃつく	.65
年下の異性とつき合う	.59
ロマンスを夢見る	.45

Table 2 第2因子に含まれる項目と因子負荷量

項 目	因子負荷量
友だちと話しをする	.76
友だちと食事に出かける	.74
その日の出来事を友だちに話す	.73
週末や休日を友だちと過ごす	.71
友だちと遊び歩く	.70
友だちと電話で話しをする	.66
友だちに内緒話をする	.64
授業が終わってから、家に直接帰らずにどこかに立ち寄る	.60
友だちとドライブに出かける	.60
友だちがたむろしている場所へ出かける	.57
友だちと散歩する	.55
友だちとコンパに出かける	.49
友だちと学校のことで話し合いをする	.46
友だちと海に行く	.46
友だちから手紙をもらう	.45
同性にほめられる	.44
散歩	.42

Table 3 第3因子, 第4因子に含まれる項目と因子負荷量

第3因子項目	因子負荷量	第4因子項目	因子負荷量
兄弟と食事に出かける	.84	勉強する	.67
兄弟と遊び歩く	.84	大学へ行く	.62
兄弟と話しをする	.79	図書館へ行く	.56
その日の出来事を兄弟に話す	.76	友だちと勉強する	.54
兄弟に内緒話をする	.76	将来設計をする	.46
兄弟と学校のことで話し合いをする	.58	よい成績をとる	.44
週末や休日を家族と過ごす	.50		
親にほめられる	.43		

Table 4 第5因子以下の因子に含まれる項目と因子負荷量

因子	項目	因子負荷量
第5因子	レコードを聴く	.73
	レコードを買う	.72
	ラジオで音楽を聴く	.62
	コンサートに行く	.53
	楽器を演奏する	.48
	読書をする	.42
	バイクに乗る	.41
	映画に行く	.40
第6因子	年上の同性とつき合う	.70
	同い年の同性とつき合う	.60
	年下の同性とつき合う	.56
	社会人と知り合いになる	.51
	同世代の人と知り合いになる	.46
第7因子	ソフトドリンクを飲む(ジュースなど)	.74
	お菓子を食べる	.70
	テレビを見る	.62
	家でのもくする	.60
	お金を稼ぐ	.46
第8因子	マリファナを吸う	.81
	その他のドラッグ(シンナーなど)を吸う	.81
	タバコを喫う	.69
	授業をさぼる	.44
	大学をさぼる	.43
第9因子	大学のスポーツ行事に参加する	.70
	運動する	.62
	大学のスポーツ行事を見に行く	.59
	大学のサークルやクラブに加わる	.51
第10因子	おしゃれをする	.64
	服を買う	.62
	劇を見に行く	.44

っていることがわかる。とりわけ異性とのつき合いは、青年期にある大学生にとっては大きな社会的強化刺激となっている。

第3因子は、「兄弟と食事に出かける」、「兄弟と話しをする」、「週末や休日を家族と過ごす」、「親にほめられる」等の8項目からなり、これは、「家族内の人間関係因子」と呼ぶことができるだろう。また第4因子には、「勉強する」、「大学へ行く」、「図書館へ行く」、「よい成績をとる」等の6項目が含まれている。これらの内容から、第4因子は「学業達成関連因子」と呼ぶことができるだろう。第3、第4因子ともに、分散の説明率はそれぞれ4%であった。これら両因子に含まれる項目内容から、兄弟や家族との人間関係上の出来事や、学業に関係する出来事、行動が、大学生にとっては一つの社会的強化刺激の因子となっていることがわかる。

また、第5因子以下の因子は次のような内容となっている。ただし、第5因子以下の因子については、分散の説明率はそれほど大きくはない。

第5因子は、「レコードを聴く」、「コンサートに行く」、「バイクに乗る」、「映画に行く」といった8項目を含み、「教養娯楽・余暇活動」に関係する因子であると考えることができる。第6因子には「年上の同性とつき合う」、「年下の同性とつき合う」、「同世代の人と知り合いになる」といった5項目が含まれ、第1因子に見られた異性とのつき合いに対して、第6因子は「同性との人間関係因子」であると考えることができる。また、第7因子は、「ソフトドリンクを飲む(ジュースなど)」、「テレビを見る」といった「気楽な活動因子」で、5項目が含まれている。第8因子は、「マリファナを吸う」、「タバコを喫う」、「大学をさぼる」、「授業をさぼる」といった5項目を含み、そのいずれもが薬物や嗜好品への接近傾向と勉強場面への回避傾向を示すものであり、「アクティング・アウト因子」とでも呼ぶことのできる因子である。さらに第9因子は、「大学のスポーツ行事に参加する」、「運動する」といった4項目からなる「スポーツ因子」、そして第10因子は、「おしゃれをする」、「服を買う」といった3項目からなり、これは「個人的外見に関する因子」であると考えることができ

る。

以上の結果をまとめてみると、わが国の大学生にとっては、まず、異性とのつき合いや性的な接触が大きな社会的強化刺激となっており、ついで、友人仲間との日常的なつき合いに関する出来事や行動が大きな社会的強化刺激となっていることがわかる。また、第6因子に同性の人たちとのつき合いに関する項目が含まれていたことを合わせ考えると、今回の被調査者である大学生の年代では、日常生活における人間関係上の出来事が社会的強化刺激として有効であると考えられる。また、家族関係や家族の成員との人間関係や、学業達成に関わる活動も大きな社会的強化刺激となっている。

このような人間関係に関する出来事や行動が大学生にとって大きな社会的強化刺激となっていることから臨床的な示唆が得られる。すなわち、たとえば社会的スキルの欠損に由来するような社会的孤立や社会的不適応を対象としたカウンセリング場面において、これらの人間関係に関する因子に含まれる項目のいずれがクライアントにとっての社会的強化刺激となっているかを解明することは、スキル訓練の対象となる場面や人物を特定する際に有用な情報を提供するものになり、また、クライアントの対人的・社会的な適応行動の獲得をねらう際に随伴させる人間関係上の強化刺激を発見する際の情報源ともなる。さらに、社会的スキルの獲得をねらったカウンセリング場面においては、こうした対人関係を操作するような強化刺激の操作が有効であることが示唆される。

また、学業達成や教養娯楽・余暇活動、スポーツに関連する行動や出来事、あるいは、ソフトドリンクを飲んだり、お菓子を食べたり、TVを見たりといった日常的に気楽で快適な感じをもたらす行動や出来事、おしゃれをしたり服を買ったりといった個人的な外見に関する行動も、さまざまな場面において社会的強化刺激として機能していることがわかる。これらの行動や出来事も、行動カウンセリング場面における社会的強化刺激として、あるいは、トークンエコノミー法を実施する際のバックアップ強化子として利用可能なものであることがわかる。

Table 5 日米大学生のARSS因子の比較\*

JAPANESE STUDENTS	AMERICAN STUDENTS**
Heterosex.Soc./Sexual Plea. Act.	Heterosexual Dating Activity
Interpers. Soc. & Commun.	Peer Interaction
Interact. with Friends	
Siblings/Family Interaction	Sibling/Family Interaction
Academic Activities	Sexual Pleasure Activity
Leisure Activity	Anti-School/Work(neg.loading)
Same Sex Interaction	Leisure/Work Activities
Pleasant Activities	Drugs/Acting Out
Drugs/Acting Out	Entertainment/Social Activity
School Sports and Clubs	Home Avoidance Activity
Personal Appearance	Romantic Fantasy Activity

\* 寄与率の高いものから順に示した

\*\* 米国の資料は Holmes et al.(1990) による

## 2. 社会的強化刺激の日米比較

ここで、今回の調査によって示された日本人大学生のARSSの因子構造と、Holmesら(1990)によって示されたアメリカの大学生を対象としたARSSの因子構造とを比較対照することによって、日常生活における社会的強化刺激の構造について日米比較を行ってみよう(Table 5参照)。なお、Holmesら(1990)の研究では、年齢範囲が17歳0カ月から26歳0カ月までの大学生231名(男子134名、女子97名)が被調査対象となっている。

因子分析結果を比較すると、日米両国のデータにおいて、いずれも10因子が抽出されている。そして、日米両データともに、10因子で総分散の54%を説明できる点も共通している。また、各因子の分散の説明率も日米両データでほぼ同様の傾向を示していた。さらに、全89項目中57項目が、日米間で類似した因子に共通して含まれていた。

さて、日米両データの因子の対応を見ると、次のようなことがわかる。すなわち、日本の第1から第3因子とアメリカの第1から第4因子は、日米両国においての対応がはっきりとしており、因子負荷量の高い項目もほぼ同一であった。第1因子は、ともに異性とのつき合いに関する項目を含み、アメリカの第1因子に含まれる合計12の項

目群のうち9項目が日本の第1因子に含まれている。日本の第1因子に含まれる項目数は17項目とアメリカよりも多かったが、それは、アメリカの第4因子に含まれる5項目のすべてが、日本の第1因子に包含されているためである。また、友人仲間との人間関係に関する出来事を含む日米の第2因子もほぼ対応するものであり、家族のメンバーとの関係に関する出来事を含む第3因子は、日米においてまったく同一であった。

これらの結果は、友人とのつき合いに関する出来事、家族との人間関係に関する出来事が、日米両国の大学生にとっては、共通して大きな社会的強化刺激になっていることを示している。ただし、アメリカにおいては、異性との日常的なつき合いと異性との性的な接触とは異なった2つの因子に別れる、すなわち、性的な問題とそうでない問題とは分化しているのに対して、日本では、その両者が同一の因子に含まれる、すなわち、大学生の社会的強化刺激としては分化していない。おそらく日本人大学生は、日常のつき合いは日常のつき合い、性的な接触は性的な接触というように割り切って考えることはできないのだろう。

また、日本の第5因子は、教養娯楽・余暇活動に関係しているという点でアメリカの第6因子に

対応していると考えられる。日米両国の大学生にとって強化価の高い余暇活動は類似しているのだろう。また、日本の第8因子は、アメリカの第7因子に対応していると考えられる。アメリカで、マリファナやその他のドラッグを吸うといった行動に実際に関わることが強化価の高い行動であるのに対し、日本では、それが実際にできなくても、潜在的には強化価の高い活動となっていると思われる。さらに、日本の第4因子は、アメリカの第5因子と類似するものであるが、アメリカでは負の負荷量を示していた。Holmesら(1990)が指摘するように、日本では、大学へ出かけた後、勉強をしたり、良い成績をとることが大学生にとって正の社会的強化刺激となっているが、アメリカでは、そうした行動は強化刺激としては機能していないことが示唆される。

一方、日本の第6、第7、第10因子は、アメリカにおいては観察されない因子であり、アメリカの第8、第9、第10因子は、日本においては観察されなかった因子である。日本では、同性の知人との付き合いや日常的に気楽で快適な感じをもたらす行動や出来事、大学でのスポーツ活動、自分が他人からどう見られているかということに関係する行動や出来事が意味を持ち、強化価の高い行動となっているのに対し、アメリカでは、そうした活動は大学生にとって強化価の高いものとはなっていない。逆に、ダンスに出かけたり飲みに行くといった社交的活動や家庭を回避する行動がアメリカ人大学生にとっては強化価が高いのに対して、日本人大学生ではそうではないというところは興味のある結果である。家庭を回避する行動は、日本人大学生よりもアメリカ人大学生にとってはむしろ、独立、あるいは自立を意味しているが故に、強化価の高い行動となっているのかもしれない。

### 3. ARSS-J開発の今後の検討課題

先に述べたように、われわれが日常生活上経験する行動や出来事、あるいはことがらが社会的な強化刺激としての価値を持つかどうかは、個人の強化歴による影響を受けるのはもちろんのこと、発達差、性差、生活環境差、あるいは文化差など

さまざまな要因による影響を受けている。

本研究の結果を考えた場合、日本版青年用強化子調査票(ARSS-J)を作成するにあたり、今回抽出された社会的強化刺激の10因子に含まれる項目はすべてで78項目あり、ARSS原版の89項目の内、合計11項目がこれらの因子の中には含まれなかった。それらの項目には、「家の雑用をする」、「親戚の家を訪ねる」、「年上の異性とつき合う」、「お酒を飲む」、「飲みに行く」、「友だちに手紙を書く」、「自転車に乗る」、「ディスコに行く」等の項目が含まれていた。これらの項目は、原版のARSSでは妥当な項目とされていたが、今回抽出されたARSSの因子構造を考えたときには、ARSS-Jの項目としては妥当でないかもしれない。ただし、青年を取り巻く強化子を探索するというARSSの臨床的な利用目的を考えると、これらの項目の中には、今回抽出された10因子には含まれないものの、現実的には強化子として機能していると思われる項目もあると考えられる(たとえば「お酒を飲む」や「ディスコに行く」など)ので、この点に関しては、今後のARSS-Jの項目の取捨選択過程の中で改めて検討を加えて行きたい。

一方、男女大学生を対象としたときには、今回抽出された10因子に含まれる社会的強化刺激の項目、とりわけ因子負荷量の高い項目は、ARSS-Jの項目として利用可能なものであると判断できであろう。

さて、現代の青年を取り巻くわが国の文化を考えたとき、現代の大学生の生活に含まれる行動やことがら、彼らを取り巻く出来事の中で、原版のARSSには含まれないわが国独自のものがある。たとえば、麻雀をしたり、コンピュータを操作したり、ゲームセンターに出かけたり、パチンコをしたり、カラオケを歌うといった行動がそうである。今回の調査では、Holmesら(1987)によって既に示されている米国版ARSSの因子構造と比較検討することも目的の一つであったために、明らかに日本の文化には適合しない項目も含んだままでARSS原版の翻訳版を使用した。したがって、ARSS-Jの作成にあたっては、原版のARSSに基づく今回の因子分析結果に加え、上に



例を示したようなわが国の青年文化の特徴を考慮した項目の収集が必要課題であると考えられる。

次に、ARSS-Jの開発にあたっては、「特定の母集団を対象とした別個の調査票」というARSS開発時のCautela (1981)の趣旨を考えると、同じ青年期といっても、対象となる青年の年齢差や性差、あるいは環境の違いを考慮して項目を準備する必要があるだろう。すなわち、青年期にあるARSS-Jの対象者が中学生であるのか、高校生であるのか、今回の調査対象者と同じく大学生であるのか、あるいは、職業を持つ青年であるのか、また職業による違いがあるのかといった諸点を考慮しなければならない。こうした対象者の下位特性の違いに応じたARSS-Jの開発が今後の検討課題であろう。

ところで、ARSSでは、社会的強化子の実態を問うための教示は、各項目に示された出来事を経験することがどのくらい満足を感じるかを5段階で評定するというものである。また、今回用いられた日本版では、各出来事の潜在的な強化価を明らかにするために、経験したことのないような場面でもその場面を想定して評定するという教示が付け加えられた。しかしながら、たとえばクライアントに望ましい適応行動の形成を試み、そこでクライアントに最適の社会的強化刺激を随伴させる手続きをとるといった臨床場面においてARSSの臨床的応用可能性を考えるならば、回答者であるクライアントに効用のある社会的強化刺激を発見するためには、単にARSSに含まれる項目に対する満足の度合いを評定させるだけでは不十分であるかもしれない。というのも、経験したことの出来事に関しては、その強化価は個人の強化歴の関数として決定されているのであろうが、「このような行動を行うとこのような結果が得られる」といった結果予期(Outcome Expectancy)が行動を決定しているとBandura (1977)が指摘するように、われわれの行動は、将来自分が手に入れることのできる強化刺激に対する期待によっても制御されていると考えられる。この時、その個人の行動形成に有効であると考えられる強化刺激には、単にそれまで経験したことの出来事のみならず、未だに経験したことはないが、

その個人にとっては主観的な期待や代理的经验に基づいて形成された、「有効性の期待できる強化刺激」が存在しているのではないかと考えられるからである。また、そうした未経験の行動や出来事の方が、個人にとっての強化価は高くなることも考えられる。

したがって、このような点を考慮してARSS-Jに含まれる項目の構成を考えるならば、ARSS-Jには、単にこれまで経験したことのある出来事だけではなく、たとえば、「今までに経験したことはないが、やってみたいこと」、「今までに経験したことはないが、もしできるとすれば大きな満足をもたらすであろう出来事」、あるいは、「やればできそうで、もしやったとしたら満足をもたらすであろう出来事」などを判断できるような質問項目を準備する必要があるかもしれない。

なお、こうした項目の取捨選択に関しては、目下資料を収集・整理中であるので、次報で結果をまとめて報告したい。また、項目の取捨選択と修正を行ったARSS-Jの完成版に関しても次報で報告する。

## 文 献

- Bandura, A. 1977 Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- Baron, A., DeWaard, R., & Galizio, M. 1981 Factor analytically derived subscales for the Reinforcement Survey Schedule. *Behavior Modification*, 5, 203-220.
- Cautela, J.R. 1981 *Behavioral analysis forms for clinical intervention*. Illinois : Research Press.
- Cautela, J.R. & Lynch, E. 1983 Reinforcement Survey Schedule : Scoring, administration, and completed research. *Psychological Reports*, 53, 447-465.
- Cautela, J.R. & Kastenbaum, R. 1967 A Reinforcement Survey Schedule for use in therapy, training, and, research. *Psychological Reports*, 20, 1115-1130.
- Holmes, G.R., Heckel, R.V., Chestnut, E., Harris, N., & Cautela, J. 1987 Factor analysis of the Adolescent Reinforcement Survey Schedule (ARSS) with college freshmen. *Journal of Clinical Psychology*, 43, 386-390.
- Holmes, G.R., Cautela, J., Sakano, Y., Rekers, G., Townsend, P., Grandner, W., Wilhelm-Dirlich, H., & Holmes, G.L. 1990 Comparison of

factor analyzed ARSS data from late adolescent in the United States, Germany, Austria, Northern Ireland, and Japan. *Paper Presented at the 12th IACAPAP*, Kyoto.

Kleinknecht, R.A., McCormick, C.E., & Thorndike, R.M. 1973 Stability of stated reinforcers as measured by the Reinforcement Survey

Schedule. *Behavior Therapy*, 4, 407-413.

Thorndike, R.M. & Kleinknecht, R.A. 1974 Reliability of homogeneous scales of reinforcers : A cluster analysis of the Reinforcement Survey Schedule. *Behavior Therapy*, 5, 58-63.